

シューマン・クアルテット～ベートーヴェンの創作史をたどる旅

飯尾洋一（音楽ジャーナリスト）

全6公演のベートーヴェン・サイクルで、16曲の弦楽四重奏曲をどう割り振るか。これは一種のパズルだ。作品の成立年代に注目するのか、各公演の演奏効果を重視するのか。いろいろな考え方があるが、明快な解答はそう簡単には見つからない。

パズルの前提条件として、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の弦楽四重奏曲は創作様式により初期・中期・後期の3つのグループに分けられる。初期は6曲、中期は5曲、後期は5曲と、微妙にアンバランスなのが厄介なところ。さらに問題を複雑にするのは後期の第13番。この曲を当初の作曲者の意図通り終楽章に「大フーガ」を置いて演奏するのか、出版された形に従って短い終楽章を使い、「大フーガ」を独立した1曲として扱うのか。あるいは二通りのバージョンで第13番を2度演奏する手もある。後期作品の曲数は流動的なのだ。一方、中期作品は5曲しかない。全6公演を初期・中期・後期の1曲ずつでそろえることができればきれいに収まるのだが、そうはいかない。

今回、シューマン・クアルテットが導き出した解法は、作品18の初期作品6曲に後のスタイルの萌芽があるとみなし、これを土台にプログラムを組むというもの。まず、第1番から第6番までを各回の1曲目

として順に割り振る。続いて、6曲それぞれの性格に着目して回ごとにテーマを設定し、これに応じた中期や後期の作品を組み合わせる。

たとえば第4回であれば、第4番 ハ短調が冒頭に置かれる。第4番は作品18のなかで唯一の短調作品。そこで、この日はベートーヴェンの影の部分に焦点を当て、第11番 ヘ短調「セリオソ」、第14番 嬰ハ短調を組合わせて「Shadows－短調」とテーマを掲げる。逆に第3回は第3番 ニ長調の喜びにあふれた楽想に呼応して、第10番 変ホ長調「ハーブ」、第9番 ハ長調「ラズモフスキー第3番」といっしょにして「Light－長調」とテーマを設定する。

離れ技は最終日。「From the Heart－メランコリー」と題し、第6番 変ロ長調、弦楽四重奏曲 ヘ長調 Hess 34（作曲者によるピアノ・ソナタ第9番 作品14-1の編曲）、第12番 変ホ長調を並べる。ここでピアノ・ソナタからの編曲作品を1曲入れることで、全6日間がすべて3曲ずつで構成されることになる。編曲作品という補助線を引いて、パズルを鮮やかに解いてみせた。

シリーズ全体のみならず、毎回の公演がベートーヴェンの創作史をたどる旅になっている。